

防災歳時記 (58)

—屋島丸台風は韋駄天だった—

(「昭和45年1月低気圧」)

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

宮澤清治

台風のみでカエル・サギが鳴く

1933(昭和8)年10月11日ヤップ島の南で発生した台風は、北西進して19日午前4時ごろ石垣島付近に達し中心気圧945hPaとなった。その後台風は向きを北東に転じ時速40kmで20日早朝、九州南端に上陸し、一段と加速して四国東部・瀬戸内海を経て中国山地を越え夕刻、若狭湾に進んだ。

20日午後1時すぎ、台風が接近した神戸市須磨沖で別府一阪神間の定期客船「屋島丸(946t)」が暴風と巨浪のために沈没した。台風は「屋島丸台風」と呼ばれた。

石垣島測候所長岩崎卓爾氏の台風の目に入ったときの状況報告がある。

「19日午前1時40分ごろから東風となり、午前2時に風速109m/s、雨は止んだ。午前3時から4時までは風速2~5rn/sと風が弱まり台風の目に入った。午前4時に最低気圧715.2mm(9535hPa)を記録、4時5分には風は北西に変わり再び強まった。

午前1時4分、セスジカエルが鳴き始め、2時20分から蒸し暑くなり、蚊が現れた。3時5分、所員瀬名波氏(46歳)の脈拍は99(平時約73)でそのときの気圧は955hPa。



岩崎卓爾 (気象百年史から)

3時29分から4時10分まで上空の層積雲が薄くなり時々星を見る。3時40分ホンゴイ(別名、五位鷲)がクワッと鳴く。海鳴りは全く聞こえない。」

台風の目に入ったとき、昆虫や鳥が飛んでいるという報告はたくさんあるが、動物の鳴き声に耳を傾け、脈拍を測るなどのきめ細かな報告には頭が下がる。

岩崎所長は妻子を故郷に残し、南海の孤島で台風と闘うこと40年。その間、台風の飛石に目を打たれ、一眼を失ったが幾多の功績を残した。測候所構内には同氏の銅像

がある(大谷東平:暴風雨、1940 ほか)。

速い台風は船を沈める

20 日午前 6 時、台風は宮崎市付近に達し中心気圧 970hPa とやや弱まったが、時速 70km 超の猛烈な速さで北東進を続けた。午前 8 時、宇和島市を経て瀬戸内海を横断し、正午ごろ兵庫県相生市付近に上陸し、中国山地を越すごろには 982hPa に衰えた。

20 日午前 7 時 50 分、屋島丸は折柄の強風を突いて神戸港に向け高松港を出港した。

船長は、NHK 大阪放送局の午前 9 時の気象通報「中心気圧 973hPa の台風が東北東に時速約 50 km で紀州沖に向けて進行中」の情報を得たが、台風進路とかけ離れているとみて、格別の天候の注意を払わずに航行を続けた。

午前 9 時半すぎ、南寄りの風波は次第に高まり、船は午後 0 時 14 分ごろ明石海峡に

入った。正午の台風の中心位置は、船の北西約 50km 付近で、正午の気象通報は「猛烈な台風は進路を北東に転じ、大阪湾に接近しつつある」と放送したが、船長は聴取していなかった。

午後 0 時 40 分、南寄りの風が 25m/s を超え突然、怒とうが上甲板に打ち上げ、船体の傾斜が刻々加わり、航行継続の見込みがなくなった。旅客に避難を告げ、汽笛を連吹して陸上に救助を求めた。

午後 1 時 5 分、船は神戸市須磨沖合で沈没し、須磨海岸はあび叫喚のちまたと化した。乗員 122 人のうち旅客 39 人・船員 26 人計 65 人が溺死し、旅客 2 人が行方不明となった(渡辺加藤一:海難史話、1979)。

台風は紀伊方面に向かうという予想に反し、瀬戸内海を横断して北上を続けた。このため、船が台風の進行方向の右側の危険半円に入り、加えて台風が猛スピードであったので暴風と高波が一段と高まった。

これが今回の遭難の一因だった。

章駄天とは、仏法の守護神で足の速い神様のことで、速い台風を章駄天台風と呼ぶ。超特急の台風の進行方向の右側で、船が遭難することがよくある。例えば、1949(昭和 24)年 6 月 21 日、貨客船「青葉丸」は、周防灘の姫島沖でデラ台風(時速 60km 超)に遭い、横転・沈没して死者・行方不明者 135 人。

1954(昭和 29)年 9 月 26 日、青函連絡船「洞爺丸」ほか 4 隻が、函館港外で「洞爺丸台風」(時速約 110km)に遭い、沈没して死者・行方不明者 1,430 人を出した。

悲劇の奥から聞こえる教訓に耳をすましたい。



台風経路図

実線：屋島丸台風、破線：洞爺丸台風

点線：デラ台風

○午前 6 時、△：午後 9 時の位置

